

日本ではじめて
五十音順の国語辞典をつくった

たに がわ こと すが

谷川士清

士清號六十六載之像
門人井舘謹圖



士清さんの生い立ち

士清さんは、宝永6年(1709)2月26日、伊勢国安濃郡八町(現在の津市八町3丁目)の恒徳堂こうとくどうという屋号を持つ町医者よしふみの家に、長男として生まれました。父は義章よしふみといい、医者いしやの号を「順端じゆんたん」といいました。医者としての評判は高く、津藩第7代藩主となった藤堂高朗公とうどう たかほらが生まれる時にも立ち会っています。このことから、後に士清さんと高朗公は仲良くなった、と伝えられています。

士清さんは、子どもの頃は「昇」または「公介」の名前で呼ばれました。小さい頃から浩天和尚こうてん おしやうと父に教えられ、人間としての教養と医者になるための勉強を一生けんめいにしました。彼の下には3人の弟がいて、すぐ下の松次郎まつじろうは3才で亡くなりましたが、次の弟順節じゆんせつ、その次の弟順育じゆんいくはともに医者となって、兄・士清を助けました。

21才の時に医学の勉強のため京都に行きました。医学のほかにも神道や国学、漢学、さらには花道なども学び、26才の時、医者として家業を継ぐため津に戻りました。

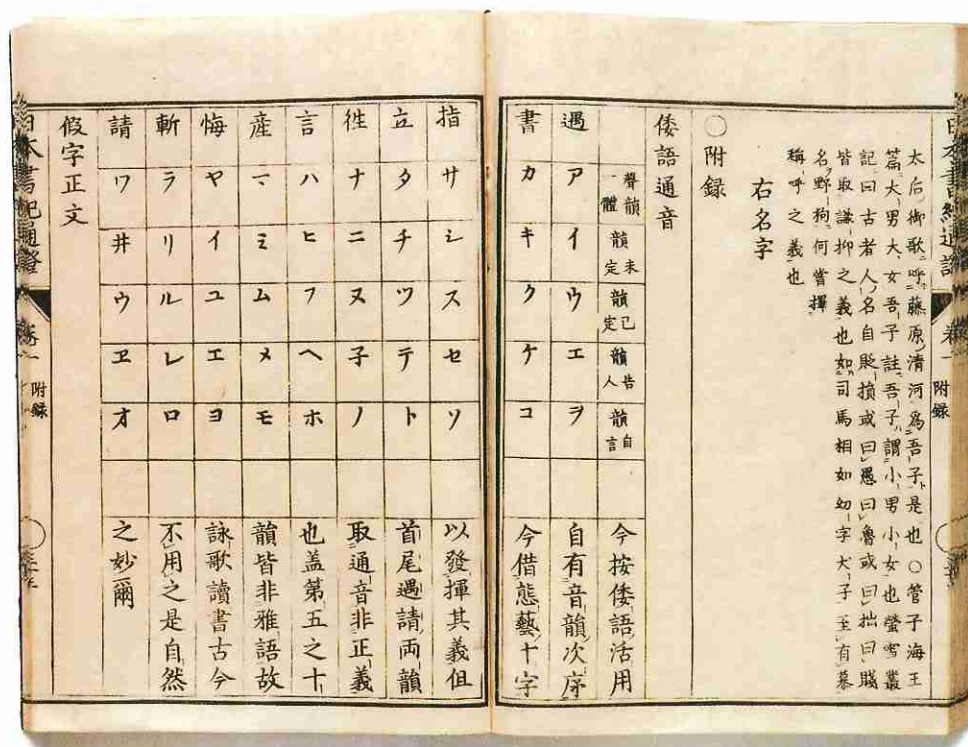
士清さんの学問と研究

京都から帰った士清さんは、「養順ようじゆん」という号をつけて町医者いしやをしながら、国学の研究にはげみました。また、自宅で「洞津谷川塾」を開いて、たくさんの人を教えました。

国学というのは、日本の古い書物を通じ、古くからの日本人の考え方を研究するもので、松阪の本居宣長もと おり のり ながさんがよく知られています。士清さんは宣長さんよりも20才ほど年上で、国学研究では宣長さんの先輩にあたります。

士清さんの国学の研究のひとつが、古い時代の日本の国の歴史の本『日本書紀ほんしよき』をわかりやすくするために説明を加えることでした。この研究は、20数年間も続けられ、のちに『日本書紀通証にほんしよき つうしやう』(全35巻)としてまとめられました。これは大変な努力のいる研究で、学者としての士清さんの名を高めました。

《倭語通音》



さらに、その中の第1巻付録である『倭語通音』は、わが国最初の「動詞活用表」となりました。これを読んで感心した宣長さんは土清さんに手紙を出し、ふたりの間に学問の交流がはじまりました。

土清さんは日本語を研究する中で、言葉を一つひとつのカードに書き、その意味や使い方を詳しく記入していきました。こうして集まった約2万1千にも及ぶ言葉を整理して、辞書に作りました。これが有名な『和訓栞』^{わくんのしおり}で、全93巻にまとめられています。この辞書はわが国最初の本格的な五十音順(あいうえお順)の国語辞典で、のちに日本語を勉強する人たちにとって、大変参考になりました。

土清さんは、長年にわたって『和訓栞』の準備をし、全部を書き終えていよいよ本にしようとしてとりかかったとき、病気のために亡くなってしまいました。^{あん えい}安永5年(1776)10月10日のことでした。

その後、『和訓栞』は、土清さんの遺志^{い し}をついだ子孫の人々が本にしました。完成したのは明治20年で、土清さんが亡くなってから110年後のことでした。その頃は今のような印刷機械がなく、大変な時間とお金がかかりました。谷川家の人たちは、家の財産を投げ打って『和訓栞』を完成させたのです。

苦勞の末に完成した『和訓栞』は、外国の人が日本語を勉強するときにも役立ちました。江戸時代の終わり頃、長崎にいた医師シーボルトが帰国する時に、幕府の許可を得て持ち帰った5種類の辞書のうち、後にオランダ人学者のホフマンにより、『和訓栞』だけが『日本文典』にとり上げられました。

津城から西へ約1kmほどの津市八町に、土清さんが住んでいた家があります。この「谷川土清旧宅」は現在、国指定史跡になっています。

土清さんの住んでいた家

津は、藤堂藩32万4千石の城下町で、八町は津と伊賀上野をつなぐ「伊賀街道」沿いにあり、商家が建ち並ぶ町でした。

土清さんの家は建てられてから200年以上たって傷んでいたもので、昭和52年(1977)から54年(1979)までの3年間をかけて、もとの姿に修理されました。旧宅をおとずれると、土清さんが住んでいた頃の様子をしのぶことができます。



伊賀街道(八町通り)沿いに建つ国指定史跡 谷川土清旧宅

反古塚(ほごづか)と墓

旧宅から200mほど北に、谷川神社があります。この神社は土清さんがまつられていて、境内の一角に「反古塚」と彫った石碑があります。

土清さんは、亡くなる1年前に、それまでに自分の書いた『日本書紀通証』などの下書きやメモなどを埋めて、その上に碑を建てました。それがこの反古塚です。“反古”というのは下書きなどのいらなくなった紙のことで、これを埋めたのは、自分の考えがのちの世の人々に間違っ^ほて伝わらないようにするためです。

この碑を建てたあと、美しい玉虫が3日間も続けて出たため、土清さんはおめでたいしるしだと喜びました。そのため、この塚は「玉虫塚」とも呼ばれるようになりました。

土清さんの墓は谷川神社のそばの福蔵寺ふくそうじにあり、墓石正面には「淡斎谷川土清之墓」たんさいの文字が刻まれています。



谷川神社の境内に建つ
市指定史跡 反古塚



福蔵寺墓所にある
国指定史跡 谷川土清墓

士清さんの生きた時代

士清さんの生きた時代は江戸時代の中ごろで、江戸幕府の将軍は8代吉宗、9代家重、10代家治の時代です。このころは自然災害が多く、生まれる2年前の宝永4年(1707)には富士山が大噴火し、毎年のように台風や水害が起こり、物価も高くなって世の中は不安定でした。

8代将軍の吉宗は世の中を安定させようと努力するとともに、海外の文化にも目を向け、初めてキリスト教以外の外国の書物を取り入れ、医学・自然科学の進歩をはかろうとしました。

津においては、7代藩主高朗の時代で、富士山の噴火で被害を受けたところを直すための工事の手伝いや、利根川の一部を直す工事を命ぜられて豊かではありませんでした。このような世の中が、士清さんの生きた時代でした。

士清さんの略年譜

西 暦	年 号	年 齢	おもなできごと
1709	宝永6	0	伊勢国安濃郡八町(現在の津市八町3丁目)に生まれる
1730	享保15	21	医学の勉強のため京都へ行く
			本居宣長が生まれる
1735	享保20	26	津にもどり、洞津谷川塾(国学の塾)を開く
1736	元文1	27	家業の医者仕事を継ぐ
1751	宝暦1	42	『日本書紀通証』が完成する
1762	宝暦12	53	『日本書紀通証』(全35巻)を出版する
1765	明和2	56	本居宣長から初めて手紙を受け取る
1770	明和7	61	この頃、本居宣長とたびたび手紙をかわす
1772	安永1	63	『和訓栞』の編纂につとめる
1776	安永5	67	『和訓栞』前編の出版準備にはげむ
			10月10日 士清なくなる
1887	明治20		『和訓栞』後編18巻が出版され、『和訓栞』完成する

士清さんの作った主な本

番号	本の名前	本の種類	本をつくった年(西暦年)
1	熱入血室之弁	医学	享保20年(1735)
2	関格異同弁	医学	享保20年(1735)
3	日本書紀通証(35巻)	国学・国語学	宝暦12年(1762)
4	鋸屑譚(上下2巻)	国学・随筆	寛延1年～安永2年(1748～1773)
5	恵露草	和歌集	宝暦3～7年(1753～1757)
6	怪談記野狐名玉(5巻)	物語	安永1年(1772)
7	読大日本史私記(1冊)	歴史学	安永4年(1775)
8	勾玉考附石剣頭考臼石考	考古学	安永3年(1774)
9	和訓栞(93巻)	辞書	安永2年～明治20年(110年間)
10	恒徳堂処方帖	薬学	
11	神代記・神武記藻塩草※	国学・神道	元文4年(1739)

※玉木正英の著述したものを、師に代って出版したもの

コラム 士清さんと納所河原のためき

士清さんは、学者だけでなくお医者さんとしても有名でした。近くの納所河原^{のう そ が わら}に住む雄狸^{おす たぬき}が、難産^{めす たぬき}で苦しむ雌狸を助けてほしいと迎えに来たので、士清さんはこれを助けた、という話が生まれたほどです。これを伝え聞いた京都大徳寺^{だいとくじ}の和尚^{もんく}さんは、「木狸庵^{もく り あん}」の額を送り、士清さんはこの額を掛けた茶室を「狸庵^{り あん}」と名づけました。この額は今、津市が保存しています。

津藩主・高朗さんの誕生に立ち会ったと伝えられる士清のお父さん・義章^{よし ちやう}さんを迎えにたのは狐で、こちらの話は「阿漕雲雀^{あ ご ぎ びり}」(三重県所蔵)という本に載せられています。

よく流行った「恒徳堂」のようすや、動物と人間の関係が今より親しい関係だった当時がしのばれる逸話^{いつ わ}ですね。



【谷川士清関係史跡案内図】



【谷川士清関係指定文化財】

- ◆国指定史跡 谷川士清旧宅 昭和42年6月22日指定 津市
谷川士清墓 昭和19年11月13日指定 福蔵寺
- ◆県指定有形文化財 谷川士清肖像画像 昭和31年5月2日指定 津市
谷川士清関係資料 附谷川順端(義章)書状など6点
平成15年3月17日指定 (財)石水会館
- ◆市指定史跡 反古塚 昭和31年5月14日指定 谷川神社
- ◆市指定有形文化財 谷川士清関係資料6種33冊 平成17年4月20日指定 専修寺

谷川士清旧宅参観案内

- ◆開館時間 午前9時から午後5時まで(入館は午後4時まで)
- ◆休館日 月曜日(月曜日が休日の場合はその翌日)、
12月28日から1月4日まで
- ◆入館料 無料
- ◆所在地 〒514-0041 津市八町三丁目9-18
TEL 059-225-4346
- ◆交通案内 近鉄名古屋線津新町駅下車西へ1.4km
三重交通バス停「津高校前」または「土手」下車400m
駐車場(2台)

2009 谷川士清生誕300年記念事業